東京裁判史観について

「一国を亡ぼすのに刃物はいらない。その民族の記憶（歴史）を消し、その上に新しい歴史を捏造、発明して押しつければ足りる」。これは白人国家が他国を侵略し統治する場合の常套手段である。日本にも、この騙しのテクニックはアメリカによって縦横無尽に使用され、日本人はこのテクニックを何の疑いもなく受け入れた。その結果、戦後日本の常識は世界の非常識と言われる迄に全ての意識が普通の国とは全く逆意識を持つようになった。今も憲法や国の防衛、国家観等、識者の多くの人達も普通の国とは真逆の意識を持ち、国を迷走させている。

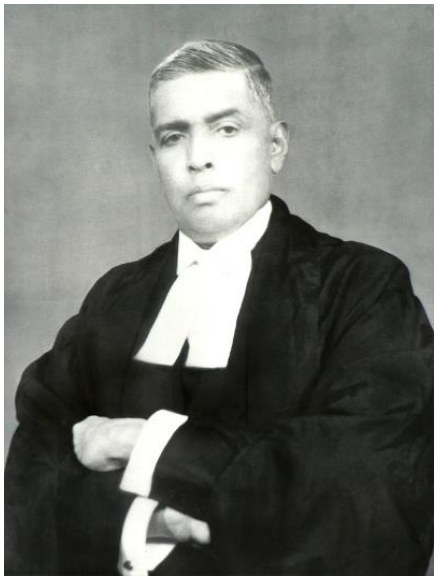
詳しく述べると、戦後、日本の八紘一宇の精神で大東亜共栄圏実現の理想を抱き戦った「大東亜戦争史観」は完全に否定され、アメリカが日本弱体化の目的で作られ、歪曲捏造された「侵略」・「植民地支配」・「残虐性」の三悪が中心となった「太平洋戦争史観」を押し付けられた。その為に彼等は事後法等の違法な方法を用いて、明らかに無法な復讐劇である東京裁判を利用して、日本人の心を東京裁判史観、自虐史観によって縛りあげた。そしてこれが正当な戦後の歴史観として定着された結果、日本は反省と謝罪が国是となるような、卑屈な戦後精神体制思想が構築され、日本人の骨の髄まで叩き込まれ、普通の国の常識に逆行する非常識が定着させられた。

大阪市西区の薩摩堀公園にある八紘一宇の記念碑。皇記 2,600 年（昭和 15 年）にこのような石碑が日本全国に建立された。

例えば自分の国を自分の手で守るという、ごく当り前の常識が「再び戦争をする国になる」とか「軍国主義が復活する」とか奇妙な意識を抱くようになっている。正に反日偏向教育の結果であろう。この様な精神の衰弱は、国の在り様を知らず知らず衰退の道に向かわせしめる、非常に恐い要素である。原爆は広島と長崎の２回で終わったが、「精神衰弱」をもたらす東京裁判史観という「精神の原爆」は末長く、ジワジワとボデーブローの如く効いて日本を暗く弱体化させて行く、「原爆より危険な代物」であることを我々は認識しなければならない。この「精神の原爆」である自虐史観の基本になっている東京裁判史観の嘘と捏造の構造を国民に知らしめ、今も続く戦後精神体制、即ち自虐史観を一蹴一掃し、戦闘には破れたが、真の戦争の目的は果たされたというこの戦争の正体を明らかにすべきである。

吉川君が東京裁判の正体は詳しく説明してくれるし、日本無罪論も説明してもらえると思うが、とにかく今日まで続いている日本の「戦争犯罪国家論」を論破し、アメリカによるこの騙し、嵌められた国家の偽装を我々の草の根運動で明らかにして行かねばなるまい。

注）パール判事
東京裁判において連合国が派遣した判事の一人で、判事全員一致の有罪判決を目指す動きに反対し、平和に対する罪と人道に対する罪は戦勝国により作られた事後法であり、事後法をもって裁くことは国際法に反するなどの理由で被告人全員の無罪を主張した。


パール判事

「八紘一宇」は建国の理想の精神を示すもの！！

出典は「日本書記」の神武天皇即位前紀にある、次の如き「令（のりごと）」による。日本国の建国の理想の精神を示すものである。

夫（そ）れ大人制（ひじりのり）を立てて、義（ことわり）必ず時に随（したが）ふ。苟（いやし）くも民に利有らば、何ぞ聖の造（わざ）に妨（たが）はむ。且当（まさ）に山林を披（ひら）き払ひ、宮室（おおみや）を経営（おさめつく）りて、恭（つつし）みて宝位（たかみくら）に臨みて、元元（おおみたから）を鎮（しず）むべし。上は乾霊（あまつかみ）の国を授けたまひし徳（みうつくしび）に答へ、下は皇孫（すめみま）の正（ただしきみち）を養ひたまひし心を弘めむ。然して後に、六合（くにのうち）を兼ねて都を開き、八紘（あめのした）を掩（おお）ひて宇（いえ）に為むこと、亦可（またよ）からずや。

＜現代語訳＞

そもそも大人（聖人）が制を立てて、道理が正しく行われる。人民の利益となるならば、どんなことでも聖の行うわざとして間違いはない。まさに山林を開き払い、宮室を造つて謹んで尊い位につき、人民を安んずべきである。上は天神の国をお授け下さつた御徳に答へ、下は皇孫の正義を育てられた心を弘めよう。その後、国中を一つにして都を開き、天の下を掩ひて一つの家とすることは、また良いことではないか。

合掌

平成２６年５月９日

志雲会代表　有馬正能